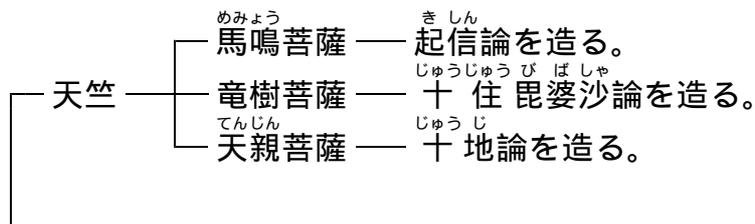
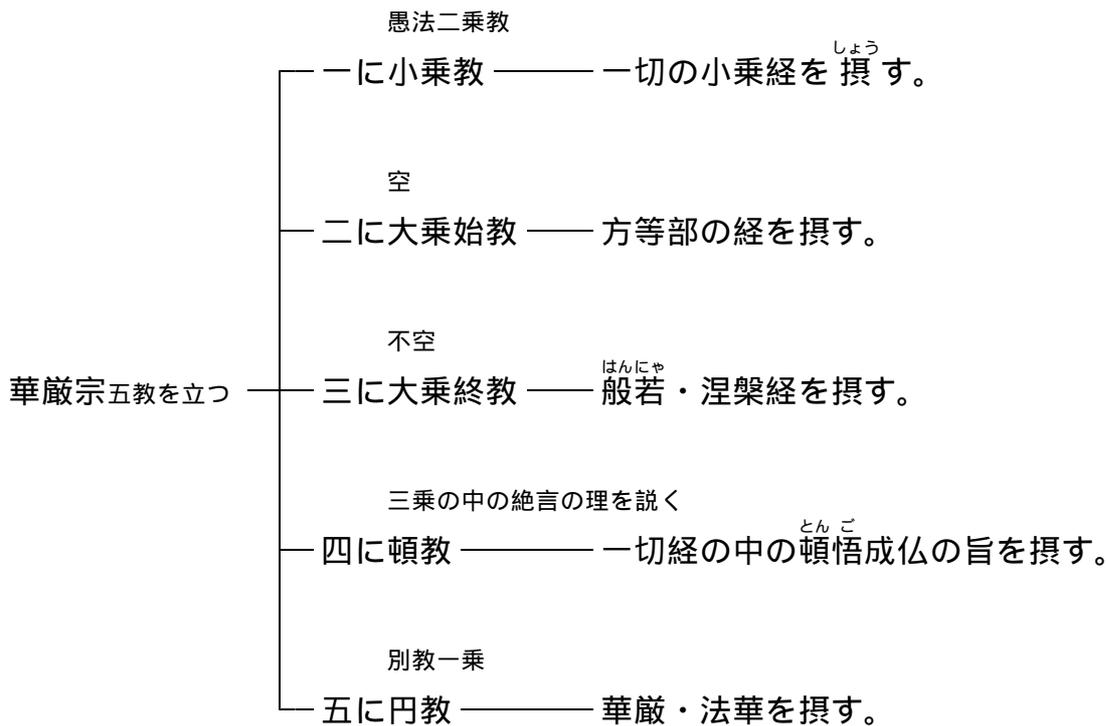
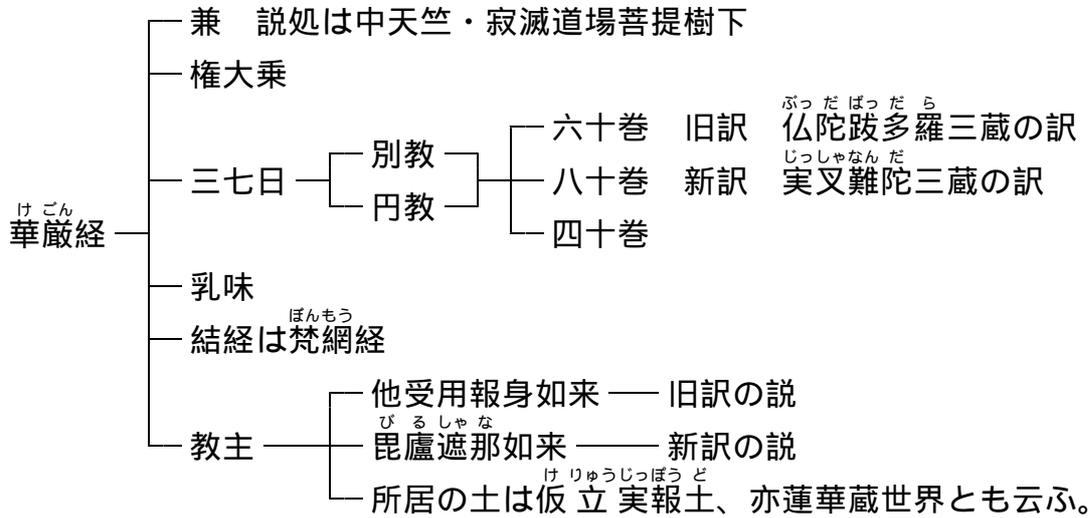
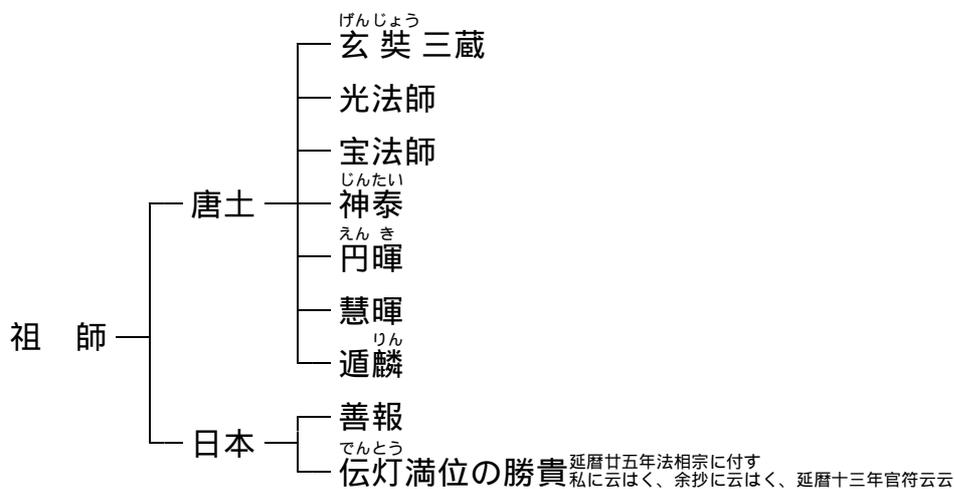
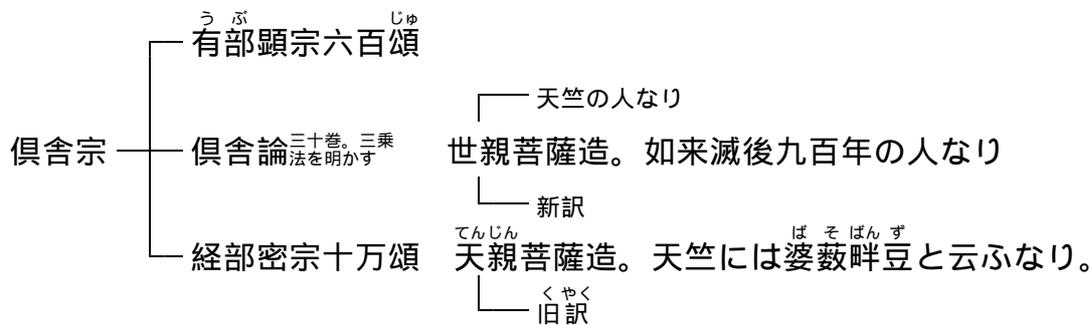
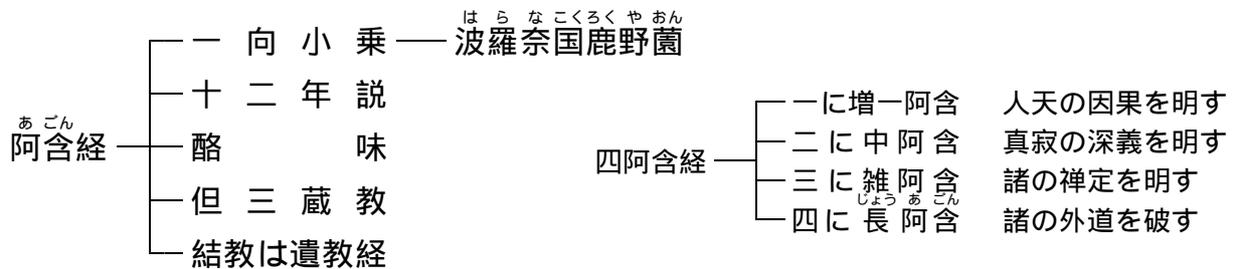
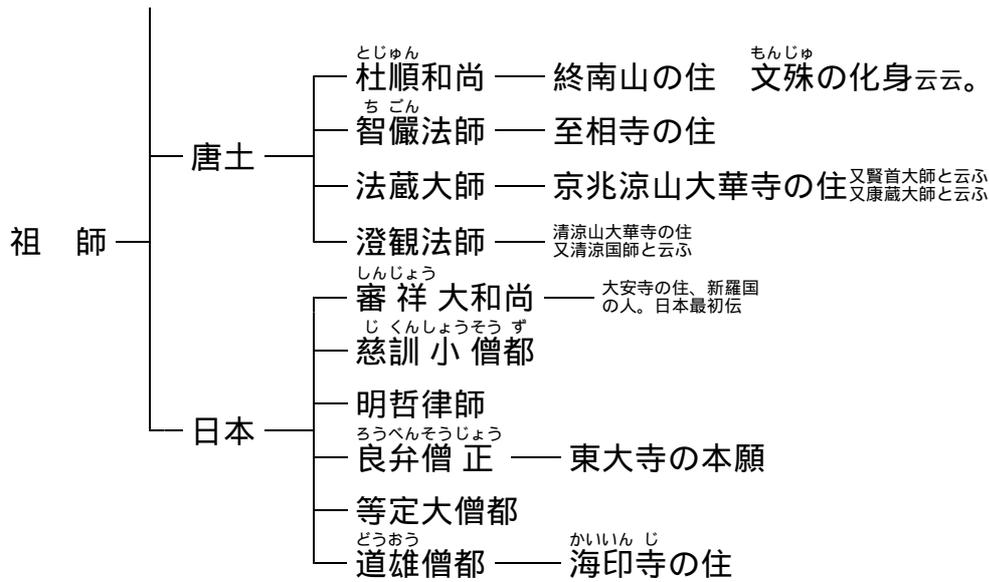
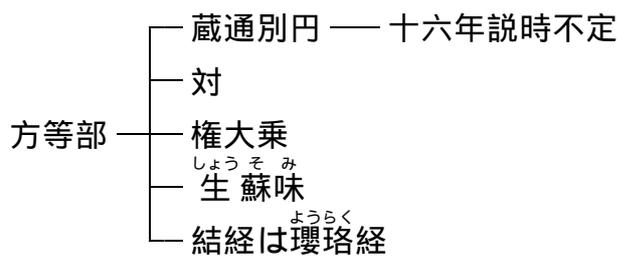
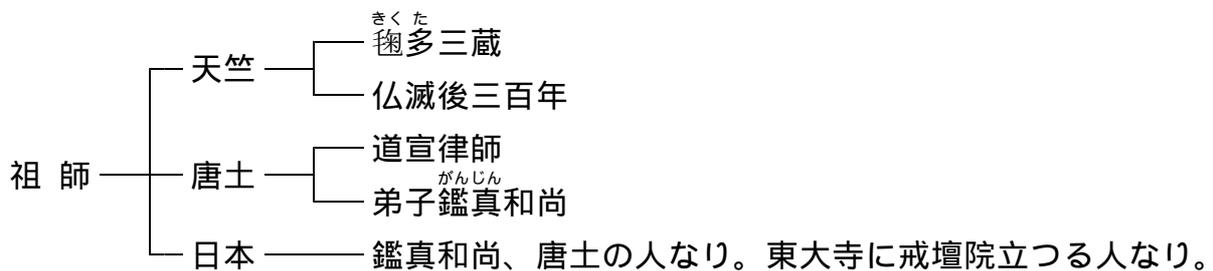
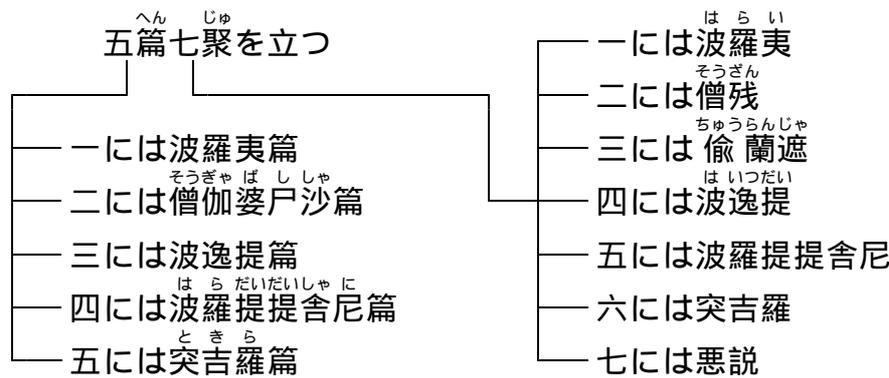
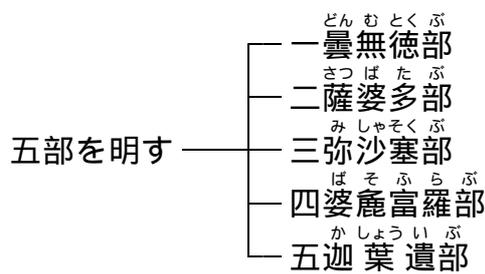
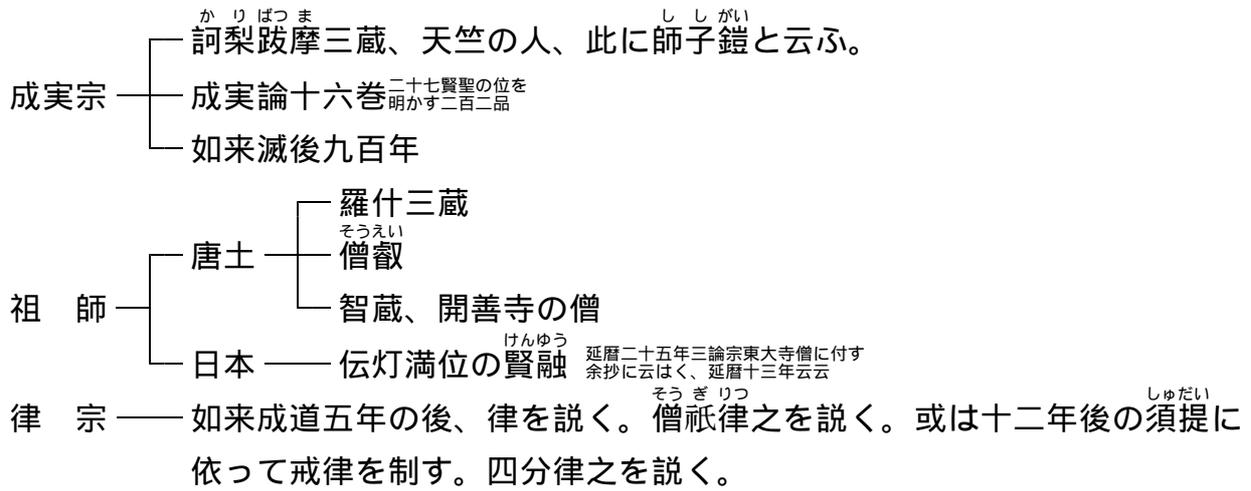


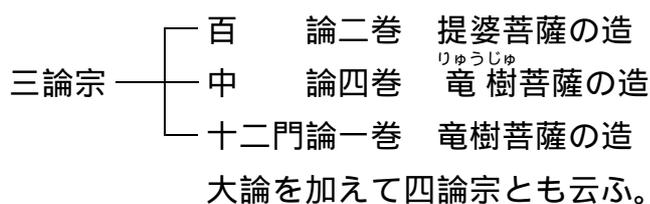
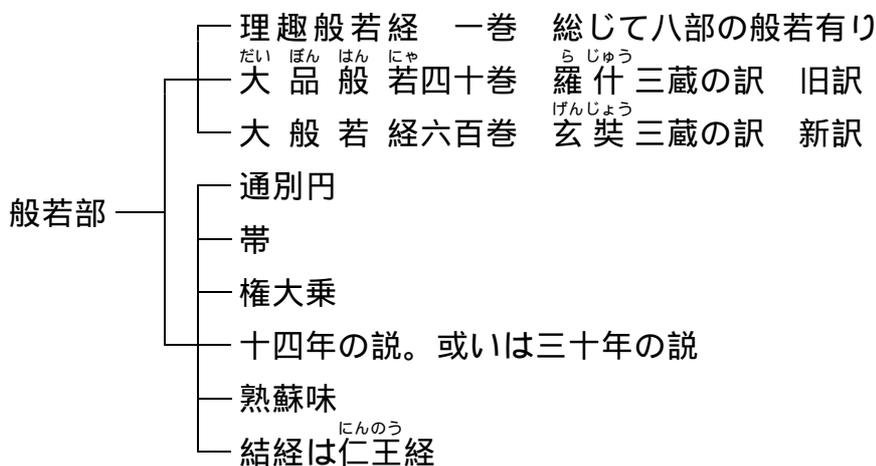
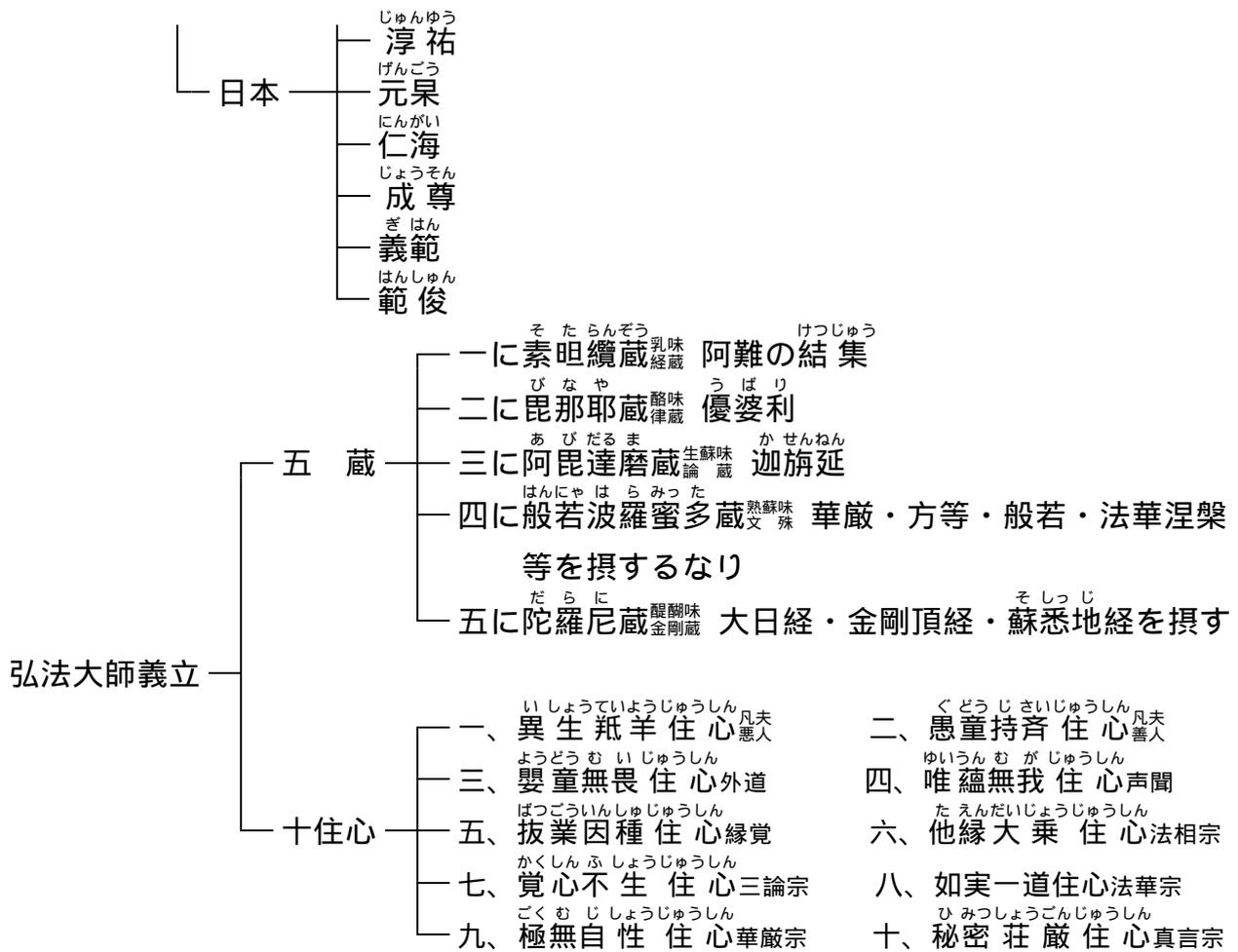
一代五時継図

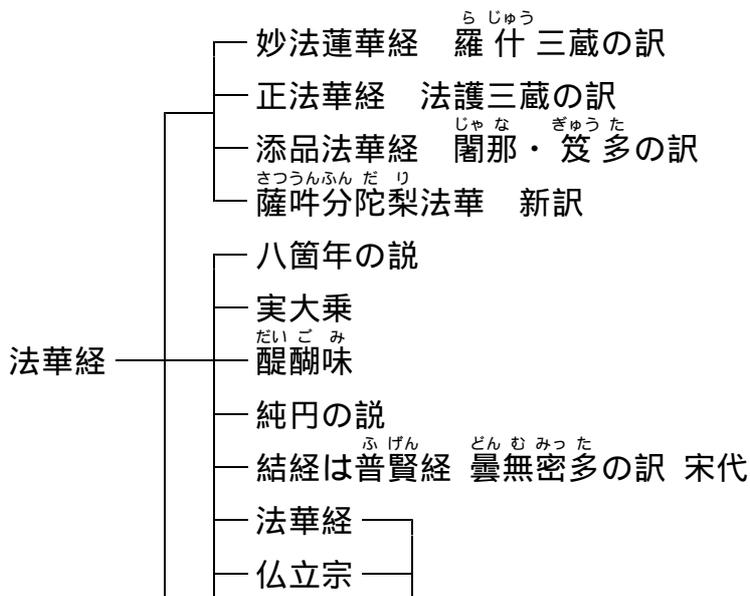
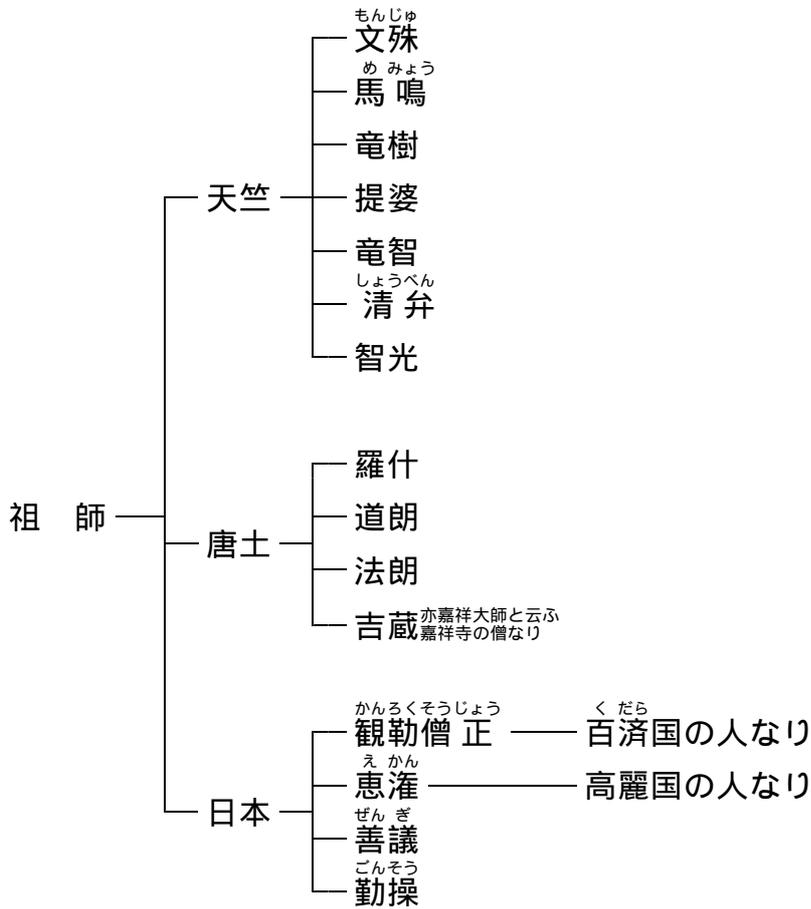
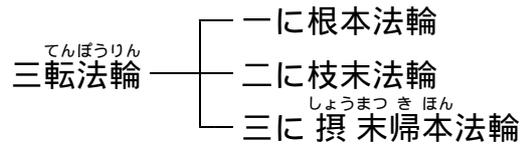
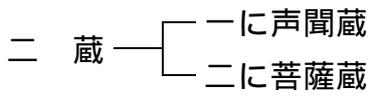
だいろん
大論に云はく百卷。竜樹菩薩の造。如来滅後七百年出世の人なり。「十九出家・三十成道・八十涅槃」。
ねはん
涅槃經に云はく「八十入滅」。あごん
阿含經にも亦此の説有り云云。

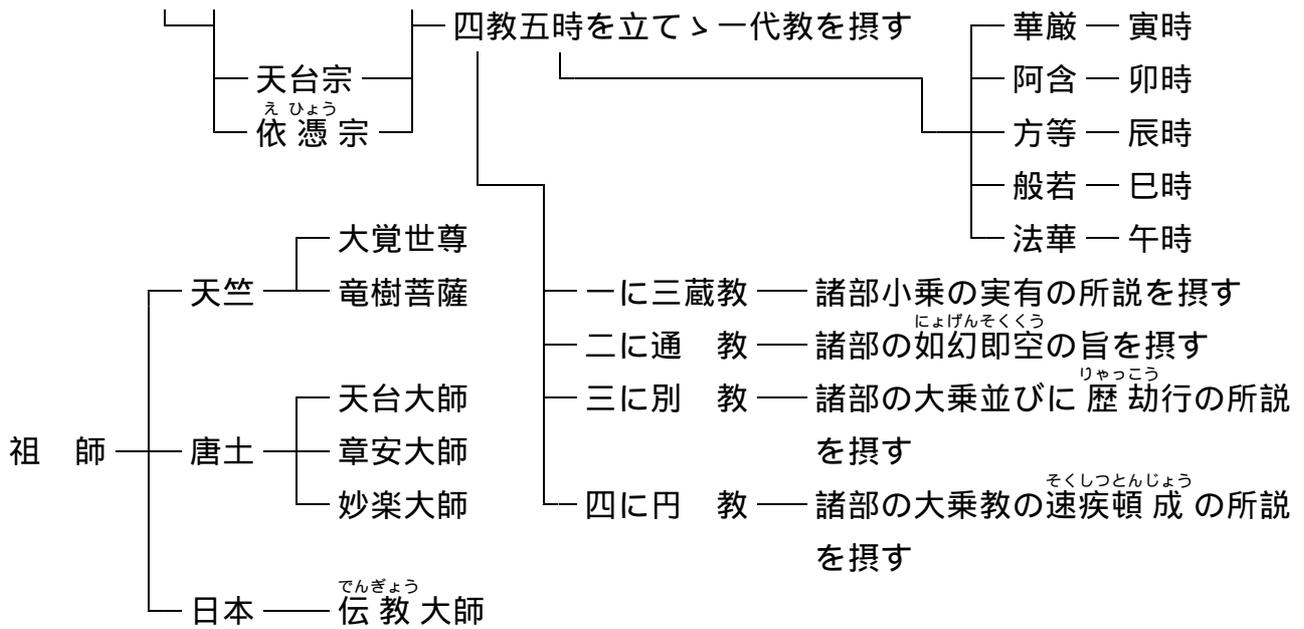






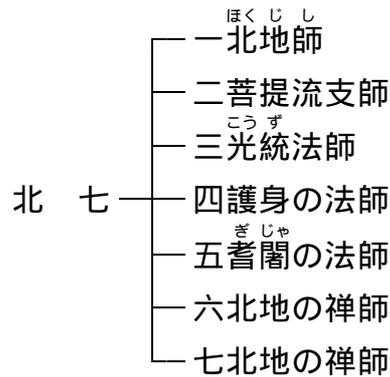
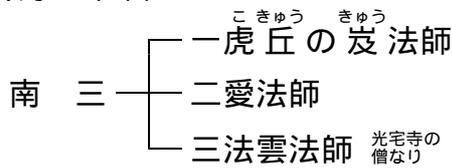






涅槃経
一日一夜の説
醍醐味
結教は像法決疑教

涅槃宗の祖師



法華の外は小乗の事

寿量品に云はく「樂於小法徳薄垢重者、為是人説我少出家、得阿耨多羅三藐三菩提」

云云。

文句の九に云はく「始成を説きたまふことは、皆小法を樂へる者の為にのみ」云云。

疏記に云はく「但し近成を樂ふ者を樂少の者と為すは、華嚴の頓部諸味の中の円」

文。

天親菩薩の法華論に云はく「一往三蔵を名づけて小乗と為し、再往は三教を名づけて小乗と為す」文。

文句の九に云はく「小を樂ふ者は小乗の人に非ざるなり。乃ち是近説を樂ふ者を小と為すのみ」文。

疏記の九に云はく「樂く小こん法とは久近を以て相望して小と為す」文。

秀句の下に云はく「仏滅度の後の六七百年の經宗論宗、九百年の中の法相の一宗は歴劫修行を説いて衆生を引擧す。是の故に未顕眞実なり」云云。

伝教大師の依憑集えひょうに云はく「新来の眞言家は則ち筆受の相承をほろぼ 泯くとうし、旧到の華嚴家は則ち影響の軌模を隠し、沈空の三論宗は彈呵の屈恥を忘れて称心の心酔を覆ひ、著有の法相宗は僕陽の歸依を非して青竜の判經を撥ふ」云云。

秀句の下に云はく「誠に願くは一乗の君子、仏説に依憑えひょうして口伝を信ずること莫れ。仰いで誠文じょうもんを信じて偽会を信ずること莫れ。天台所釈の法華宗の諸宗に勝る、寧ろ所伝を空しうせんや」と。又云はく「謹んで無量義經を案ずるに云はく、次に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説き、菩薩の歴劫修行を宣説す已上經文。大唐の伝に云はく「方等十二部經とは法相宗の所依の經なり。摩訶般若とは三論宗の所依の經なり。華嚴海空とは華嚴宗の所依の經なり。俱に歴劫修行を説いて未だ大直道を知らず」文。

妙樂大師の弘決の九に云はく「法華以前は猶是外道の弟子なり」文。

伝教大師の守護章の上に云はく「妙法ほかの外更に一句の經無し」文。

智証大師の授決集の上に云はく「經に大小無く、理に偏円無からん。一切人に依らば、仏説無用ならん。若し然らずんば、文に拠って伝ふべし。己が父は国王に勝ると執すること莫れ。又他に劣ると謂ふこと莫れ。然も家々の尊勝、国々の高貴、大小尊卑、各分齊ぶんざい有り。土を以て金と為さば家々に之有り。金を以て金と為さば有無ところ 処を異にす。久成の本、開權の妙、法華独り妙にして独り勝る。強ひて抑へて之を喪し仏説を哽塞す。如来とがを咎む合し、伝者を非すること莫れ」と。又云はく「国々とは五味、家々とは四教八教なり」文。

天台玄義の十に云はく「若し余經を弘むるには教相を明かさざれども義に於て傷むること無し。若し法華を弘むるには教相を明かさざれば文義欠くること有り。但、聖意幽隱ゆうおんにして教法いよいよ 難し。前代の諸師、或は名匠に祖承し、或は思ひ袖しゅうきん 衿より出づ。阡陌せんびやく 縦横なりと雖も、孰れか是なることを知ること莫し。然るに義双び立たず、理兩つながら存する無し。若し深く所以ゆえ 有りて復修多羅と合する者は録して之を用ひ、文無く義無きは信受すべからず」と。

一 開会の事

寿量品に云はく「諸の經方に依って好き薬草の色香美味、皆ことごと 悉く具足するを求めて擣とう 篩し 和合す」文。

文句の九に云はく「經方とは即ち十二部教なり。薬草は即ち教の所詮の八万の法門なり。香美味とは戒定慧なり。空觀は擣とう の如く、仮觀は篩し の如く、中觀は合するが如し」文。

大教に云はく「衆流海しゅる に入って同一鹹味どういつかんみ なり。故に海味と云ふ」文。

玄の三に云はく「諸水、海に入れば同一鹹味なり。諸智、如実智に入れば本の名字を失ふ」文。

一 是諸經の王と云ふ事

信解品しんげほんに云はく「並びに親族国王大臣あつを会むる」と。

文句もんくの六に云はく「国王ぜんとんとは一切漸頓の諸經なり」と。

疏記しよの六に云はく「諸の小王を廃して唯一の主を立つ。是の故に法華を王中の王と名づく」文。

一 法華已前の説を権と云ふ事

玄義の三に云はく「涅槃ねはんの聖行品しょうぎょうに追したがって衆經を分別す。故に具つばさに四種の四諦を説く。徳王品に追ほろぼって衆經を混す」文。

釈籤しゃくせんの三に云はく「涅槃に追かえと言ふは退なり。却かえって更に前の諸味を分別するなり。混みんとは合会ごうえなり。法華より已前諸經皆混す。此の意は則ち法華の部に順ずるなり」文。

弘の三に云はく「彼の經の四經皆常住を知る。故に本意は円に在り」文。

玄義の四に云はく「法華の意を得る者は涅槃に於て次第の五行を用ひざるなり」文。

一 常好坐禅と云ふ事

安樂行品あんらくぎょうに云はく「亦とも、与ねがに師を同じうすることを樂はざれ。常に坐禅を好む」文。普賢經ふげんに云はく「専もつぱら大乘を誦し、三昧に入らず」文。又云はく「其れ大乘經典どくじゆを讀誦する有らば諸悪永く滅して仏慧より生ずるなり」文。

一 天台宗の阿弥陀の事

弘決の二に云はく「諸教の讚むる所多く弥陀じゆんに在り。故に西方を以て一准と為す」文。私に云はく、此の釈文殊説・文殊問の兩經に依るなり。常坐三昧の下。

止觀の二に云はく「若し弥陀これを唱ふれば即ち是十方の仏を唱ふる功德と等し。但専もつぱら弥陀を以て法門の主と為す。要を挙げて之を言はば、歩々声々念々ただ唯阿弥陀仏に在り」文。私に云はく、此の釈般舟三昧經はんじゆざんまいに依るなり。常行三昧の下、口説嘿くせつもくの下。又云はく「意に止觀を論せば、西方阿弥陀仏を念ず。此を去ること十萬億ぶつせつ仏刹」文。此の釈、般舟三昧經の文に依るなり。常行三昧の下。又云はく「陀羅尼呪たらにじゆを誦し三宝十仏を請じ、摩訶祖持陀羅尼まかそじしゆいを思惟せよ」文。此の釈は方等陀羅尼經ほうどうに依る。半行半坐三昧の下。又云はく「三宝・七仏・釈尊・弥陀、三陀羅尼、二菩薩・聖衆しょうじゆを礼せよ」と。此の釈は諸經に依る。非行非坐三昧の下。

玄義の九に云はく「諸行は傍の実相を以て体と為す。体行俱に麤なり」文。又云はく「諸經の方法に依る常行等の行は傍を以て体と為す。体行俱に麤なり」文。

已上四十余年の經釈

止觀の二に云はく「別に一卷有り、法華三昧と名づく。是天台大師の著はす所なり。世るでんに流伝して行者之を宗たつとぶ。此即ち説嘿せつもくを兼ね。復別に論ぜざるなり」文。

法華三昧に云はく「道場よの中に於て好き高座を敷き、法華經一部を安置し、亦未だ必

ず形像・舍利並びに余の經典を安ずることを須ひず。唯法華經を置け」文。

止觀の二に云はく「意の止觀とは、普賢觀に云はく、專ら大乘を誦して三昧に入らず、日夜六時に六根の罪を懺す。安樂行品に云はく、諸法に於て行ずる所無く、亦不分別を行ぜざれ」文。

法華經に云はく「乃至余經の一偈をも受けざれ」文。又云はく「復舍利を安んずることを須ひざれ」文。

一 天台の念仏の事

止觀の六に云はく「見思の惑即ち是仏法界なりと覺して法身を破せざるを念仏と名づく」文。

止觀の二に云はく「意の止觀とは、普賢觀に云はく、專ら大乘を誦して三昧に入らず、日夜六時に六根の罪を懺す。安樂行品に云はく、諸法に於て行ずる所無く、亦不分別を行ぜざれ」と。

秀句の下に云はく「能化の竜女 歴劫の行無く、所化の衆生も亦歴劫無し」文。

一 法華成仏人数の事

二の卷舍利弗は華光如来、三の卷迦葉は光明如来、須菩提は名相如来、迦旃延は閻浮那提金光如来、目連は多摩羅跋旃檀香如来、四の卷富楼那は法明如来、陳如等の千二百は普明如来、阿難は山海慧自在通王仏、羅睺羅は蹈七宝華如来、五の卷提婆達多は天王如来、摩訶波闍波提比丘尼は一切衆生喜見仏、耶輸多羅女は具足千万光相如来、娑竭羅竜王の女八歳の竜女は無照光如来正法華經の説なり。提婆品に云はく「当時の衆会皆竜女を見る、忽然の間に變じて男子と成り、菩薩の行を具して即ち南方無垢世界に往き、宝蓮華に坐して等正覺を成じ、三十二相八十種好あり。普く十方一切衆生の為に妙法を演説す」文。又云はく「爾の時に娑婆世界の菩薩・声聞・天竜・八部・人と非人と、皆遙かに彼の竜女の成仏して普く時の会の人天の為に法を説くを見て、心大いに歡喜して悉く遙かに敬礼す」文。

一 四十余年の諸の經論に女人を嫌ふ事

華嚴經に云はく「女人は地獄の使ひなり能く仏の種子を断ず。外面は菩薩に似て内心は夜叉の如し」文。又云はく「一たび女人を見れば能く眼の功德を失ふ。縦ひ大蛇を見ると雖も女人を見るべからず」文。

銀色女經に云はく「三世の諸仏の眼は大地に墮落すとも、法界の諸の女人は永く成仏の期無けん」文。

華嚴經に云はく「女人を見れば眼大地に墮落す。何に況んや犯すこと一度せば三惡道に墮つ」文。

十二仏名經に云はく「仮使法界に遍する大悲の諸菩薩も、彼の女人の極業の障りを降伏すること能はず」文。

大論に云はく「女人を見ること一度なるすら永く輪廻の業を結す。何に況んや犯すこ

と一度、定んで無間獄に墮す」文。

往生礼讃に云はく「女人と及び根欠と二乗種とは生ぜず」文。

大論に云はく「女人は悪の根本なり。一たび犯せば五百生、彼の所生の処六趣の中に輪廻す」文。

華嚴經に云はく「女人は大魔王なり、能く一切の人を食す。現在には纏縛と作り後生は怨敵と為る」文。

一 真言を用ひざる事

伝教大師の依憑集の序に云はく「新来の真言家は則ち筆受の相承を混す」文。

安然の教時義の第二に云はく「問ふ、天台宗の遺唐の決義に云はく、此の大盧遮那經は天台五時の中に於て第三時方等部の撰なり。彼の經の中に四乗を説くを以ての故に云云。此の義云何。答ふ、彼の決義に云はく、伝へ聞く、疏二十卷有り、但未だ披見せず云云。此は是未だ經意を知らざる誤判なり。何となれば、天台第三時の方等教は四教相對して大を以て小を斥ひ、円を以て偏を弾ず。今の大日經は応供・正遍知、衆生の樂に随つて四乗の法及び八部の法を説きたまふ。而も是は一切智智一味云云。若し爾らば法華と同なりと謂ふべし。何ぞ方等弾斥の教に撰するや」文。

広修・維縑の唐決に云はく「問ふ、大毘盧遮那一部七卷には、薄伽梵、如来加持廣大金剛法界宮に住して一切の持金剛者の為に之を演説するなり。大唐の中天竺国の三蔵輸婆迦羅、唐には善無畏と言ふもの訳す。今疑ふ、如来の所説、始め華嚴より終はり涅槃に至るまで、五時四教の為に統撰せざる所無し。今此の毘盧遮那經を以て何の部・何の時・何の教にか之を撰せん。又法華の前説とや為さん、当に法華の後説とや為さん。此の義云何。答ふ、謹んで經文を尋ぬるに方等部に属す。声聞・縁覺に被らしむる故に、不空羂索・大宝積・大集・大方等・金光明・維摩・楞伽・思益等の經と同味なり。四教・四仏・四土を具す。今毘盧遮那經の法界宮に於て説くことを顯はす。乃ち是法身の寂光土なり。勝に従つて名を受くるなり。前後詳らかに明かすべし」云云。

一 法華と諸經との勝劣の事

法華經 第一 本門第一 已今当第一。藥王今汝に告ぐ、諸經の中に於て最も其の上在り。迹門第二 又云はく、我が所説の諸經而も此の經の中に於て法華最も第一なり云云。

涅槃經 第二 是經出世

無量義經 第三 次に方等十二部經を説く。

華嚴經 第四

般若經 第五

蘇悉地經 第六 第一に云はく、三部中に於て此の經を王と為す。中卷に云はく、猶成就せざれば或は復大般若經を転読すること七遍或は一百遍。

大日經 第七 三國に未だ弘通せざる法門なり。

一 鎮護国家の三部の事

法華經	密嚴經	仁王經	不空三蔵大曆に法華寺に之を置く	
			唐の大曆二年に護摩寺を改めて法華寺を立て	
			中央に法華經・脇土に兩部の大日なり	
法華經	浄名經	勝鬘經	人王三十四代推古天王の御宇 聖徳太子	
			四天王に之を置く 摂津国難波郡	
			仏法最初の寺なり	
法華經	金光明經	仁王經	人王五十代桓武天王の御宇 伝教大師	
			比叡山延暦寺止観院に之を置かる	
			年分得度者二人 <table border="0" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr> <td>—</td> <td>一人は遮那業</td> </tr> <tr> <td>—</td> <td>一人は止観業</td> </tr> </table>	—
—	一人は遮那業			
—	一人は止観業			
大日經	金剛頂經	蘇悉地經	五十四代仁明天王の御宇	
			慈覚大師、比叡山東塔の西総持院に之を置かる	
			御本尊は大日如来 金・蘇二疏十四卷之を安置せらる	

一 悲華經の五百の大願等の事並びに示現等

第一百十三願に云はく「我来世穢惡土の中に於て当に作仏することを得べし。則ち十方浄土の擯出の衆生を集めて我当に之を度すべし」文。

第一百十四願に云はく「我無始より来 積集せる諸の大善根一分も我が身に留めず、悉く衆生に施さん」文。

第一百十五願に云はく「十法界の諸の衆生、無始より来た造作する所の極重五無間等の諸罪合して我一人の罪と為す。大地獄等に入って大悲代はって苦を受けん」文。

悲華經に云はく「我が滅度の後、末法の中に於て大明神と現じて広く衆生を度せん」文。

涅槃經の二に云はく「爾の時に如来、棺の中より手を出だして阿難を招き密かに言はく、汝悲泣すること勿れ。我還つて復閻浮に生じて大明神と現じて広く衆生を度せん」文。又云はく「汝等悲泣すること莫れ。遂に瞻部州に到つて衆生を度せんが為の故に大明神と示現せん」文。

悲華經に云はく「第五百願に、我来世穢惡土の中に於て大明神と現じて当に衆生を度すべし」文。

大隅正八幡の石の銘に云はく「昔は靈鷲山に在つて妙法華經を説く。衆生を度せんが為の故に大菩薩と示現す」文。

行教和尚の夢の記に云はく「阿弥陀三尊」と。

延暦二十三年甲申春、伝教大師渡海の願を遂げんが為に、筑前宇佐の神宮寺に向かつて自ら法華經を講ず。即ち託宣して云はく「我此の法音を聞かずして久しく歳年を歴たり。幸ひに和尚に値遇して正教を聞くことを得て至誠隨喜す。何ぞ徳を謝するに足ら

ん。苟しくも我が所持の法衣有り。即ち託宣の主、齋殿を開いて手に紫の袈裟一つを捧げて和尚に上る。大悲力の故に幸ひに納受を垂れたまへと。是の時禰宜・祝等各之を随喜す。元来此くの如き奇事を見ず聞かざるかなと。彼の施す所の法衣は山王院に在り」文。元慶元年丁酉十一月十三日、権大宮司藤原実元の女七歳にして託宣して云はく「我日本国を持ちて大明神と示現す。本体は是釈迦如来なり」と。

延喜二年四月二日二歳計りの小児に託宣して云はく「我無量劫より以来度し難き衆生を教化す。未度の衆生の為に此の中に在って大菩薩と示現す」文。

一 北野天神法華経に歸して真言等を用ひざる事

天神の託宣に云はく「吾円宗の法門に於て未だ心に飽かず。仍って遠忌追善に当たつては須く密壇を改めて法華八講を修すべし。所以に曼陀羅供を改めて法華八講を始む。吉祥院の八講と号する是なり。彼の院は北野天神の御旧跡なり。

一 賀茂大明神法華を信ずる事 一条院の御時代記に之有り

慧心僧都賀茂の社に七箇日参籠して、出離生死の道は何れの経にか付くべきと祈誠有れば、示現して云はく「釈迦の説教は一乘に留まり、諸仏の成道は妙法に在り、菩薩の六度は蓮華に在り、二乗の作仏は此の経に在り」文。

伝教大師賀茂大明神に参詣して法華経を講ず。甲冑をぬいで自ら布施し給ひ畢んぬ。

文句の十に云はく「得聞是経不老不死とは此須く観解すべし。不老は是楽、不死は是常。此の経を聞きて常楽の解を得」文。

涅槃経の十三に云はく「是の諸の大乗方等經典は復無量の功德を成就すと雖も、是の経に比せんと欲するに喩へと為ることを得ず。百倍千倍百千万億倍乃至算数譬喩も及ぶこと能はざる所なり。善男子、譬へば牛より乳を出だし、乳より酪を出だし、酪より生蘇を出だし、生蘇より熟蘇を出だし、熟蘇より醍醐を出だし醍醐最上なり。若し服すること有らん者衆病皆除く、所有の諸薬悉く其の中に入るが如し。善男子、仏も亦是くの如し。仏より十二部経を出生し、十二部経より修多羅を出だし、修多羅より方等経を出だし、方等経より般若波羅密を出だし、般若波羅密より大涅槃を出すこと猶醍醐の如し。醍醐と言ふは仏性を喩ふ。仏性とは即ち是如来なり」文。

一 金剛峰寺建立修業縁記に云はく「吾入定の間、知足天に往きて、慈尊の御前に参仕すること五十六億七千余歳の後、慈尊下生の時、必ず随従して吾が旧跡を見るべし。此の峰等閑にすること勿れ」文。

一 弘決に云はく「若し衆生・生死を出でず、仏乘を慕はずと知らば、魔是の人に於て猶親想を生ず」文。

五百問論に云はく「大千界塵数の仏を殺すは其の罪尚軽し。此の経を毀謗するは罪彼よりも多し。永く地獄に入つて出づる期有ること無し。読誦の者を毀滅する亦復是くの如し」文。

一 広宣流布すべき法華の事

伝教大師の守護章に云はく「正像稍過ぎ已はって末法太だ近きに有り。法華一乗の機、今正しく是其の時なり。何を以て知ることを得るや。安樂行品に云はく、末世法滅時」文。

秀句の下に云はく「代を語れば則ち像の終はり末の初め、地を尋ぬれば唐の東、羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生闘争の時なり。経に云はく、如来現在猶多怨嫉況滅度後と。此の言良に所以有るなり」文。

道暹和尚の輔正記に云はく「法華の教興れば権教即ち廃す。日出でぬれば星隠れ、巧みなるを見て拙きを知る」文。

法華経の安樂行品に云はく「一切世間怨多くして信じ難し」文。藥王品に云はく「我が滅度の後、後五百歳の中、閻浮提に広宣流布して断絶せしむること無けん」文。勸発品に云はく「我今神通力を以ての故に是の経を守護し、如来の滅後閻浮提の内に於て広く流布せしめて断絶せざらしめん」と。

文句の一に云はく「但、当時大利益を獲るのみに非ず、後五百歳遠く妙道に沾はん」文。

一乗要決に云はく「日本一州円機純一にして、朝野遠近同じく一乗に歸し、緇素貴賤悉く成仏を期す」と。

安然の広釈に云はく「彼の天竺国には外道有りて仏道を信ぜず。亦小乗有りて大乘を許さず。其の大唐国には道法有りて仏法を許さず。亦小乗有りて大乘を許さず。我が日本国には皆大乘を信じて一人として成仏を願はざるもの有ること無し」と。瑜伽論に云はく「東方に小国有り、唯大乘の機のみ有りと。豈我が国に非ずや」文。

一 不謗人法の事

安樂行品に云はく「人及び經典の過を説くことを樂はざれ。亦諸余の法師を輕慢せざれ」文。

止観の十に云はく「夫仏説に兩説あり。一に撰、二に折。安樂行の長短を称へざるが如き是撰の義なり。大經の刀杖を執持し乃至首を斬る、是折の義なり。与奪途を殊にすと雖も、俱に利益せしむ」文。

弘決の十に云はく「夫仏法兩説等とは、大經の執持刀杖等とは第三に云はく、善男子正法を護持する者五戒を受けず威儀を修せず、乃至下の文は仙予国王等の文なり」文。

文句の八に云はく「大經には偏に折伏を論じ一子地に住す。何ぞ曾て撰受無からん。此の経には偏に撰受を明かせども頭七分に破る。折伏無きに非ず。各一端を挙げて時に適ふのみ」文。

顯戒論の中に云はく「論じて曰はく、持品の上位は四行を用ひず、安樂の下位は必ず四行を修す。摩訶薩の言定めて上下に通ず」文。

文句の八に云はく「持品は八万の大士忍力成ずる者此の土に弘經す。新得記の者は他土に弘經す。安樂行の一品なり」文。

疏記の八に云はく「持品は即ち是悪世の方軌、安樂行は即ち是始行の方軌、故に住忍辱地等と云ふ。安樂行品に云はく、他人及び經典の過を説かざれ。他人の好悪長短を説かざれ」文。

一 念仏は一切衆生往生せざる事 並びに難行道次に六道輪廻の事

善導和尚の玄義分に云はく「問うて曰く、未審、定・散の二善出でて何れの文にか在る。今既に教備はって虚しからず。何れの機か受くることを得る。答へて曰く、解するに二義有り。一には謗法と無信八難及び非人と此等は受けざるなり。斯れ乃ち朽林頑石生潤の期有るべからず。此等の衆生は必ず受化の義無し。斯れを除いて已外は一信心樂して往生を求願すれば、上一形を尽くし、下十念を収む。仏の願力に乗じて皆往かずといふこと莫し」文。

往生礼讃に云はく「女人と及び根欠と二乗種とは生せず」文。

一 八難処の事

弘決の四に云はく「北州と及び三悪に長寿天と並びに世智弁聡と、仏前仏後と、諸根不具を加ふ。是を八難と為す」文。

善導の遺言に云はく「我、毎日阿弥陀經六十卷念仏六万返懈怠無く、三衣は身の皮の如く、瓶鉢は両眼の如く、諸の禁戒を持ち一戒をも犯さず。未来の弟子も亦然り。設ひ念仏すと雖も、戒を持たざる者は往生即ち得難し。譬へば小舟に大石を載せ大悪風に向かつて去るが如し。設ひ本願の船有りと雖も、破戒の大石重きが故に岸に就くこと万が一なり」文。

観念法門に云はく「酒肉五辛誓って発願して手に捉らざれ、口に喫らはざれ。若し此の語に違せば即ち身口俱に悪瘡に著かんと願せよ」文。

法然上人の起請文に云はく「酒肉五辛を服して念仏を申さば予が門弟に非ず」文。

観念法門經に云はく「戒を持ちて西方弥陀を思念せよ」文。

無量寿經に云はく「三心を具する者必ず彼の国に生ず」文。

善導の釈に云はく「若し一心も少なければ即ち生ずることを得ずと。明かに知んぬ、一少は是更に不可なることを。茲に因って極樂に生ぜん」と欲するの人は全く三心を具すべきなり」と。

月蔵經に云はく「我が末法の時の中の億々の衆生、行を起こし行を修すとも、未だ一人も得る者有らず。当今は末法なり。現に是五濁悪世なり。唯浄土の一門のみ有って通入すべきの路なり」文。

遺教經に云はく「浄戒を持つ者は販売貿易し、田宅を安置し、人民・奴婢・畜生を畜養することを得ざれ。一切の種植及び諸の財宝皆当に遠離すること火坑を避くるが如くすべし。草木を斬伐し、墾土掘地することを得ざれ」文。

善導和尚所釈の観念法門經の酒肉五辛を禁ずる事の依經をいはゞ

無量寿經一に依り二卷 十六觀經二に依り一卷

四紙の阿弥陀經三に依り一卷 般舟三昧四に依り

十往生經五に依り一卷 淨土三昧經六に依る一卷

双觀經そうかんぎょうの下に云はく「無智なの人の中にして此の經を説こと莫なれ」文。

一 觀經と法華經との説時各別の事

善導和尚しよの疏しよの四に云はく「仏彼の經を説きたまひし時、処別・時別・教別・対機別・利益別なり。又彼の經を説きたまふ時は即ち觀經・弥陀經等を説きたまふ時に非ず」文。

阿弥陀經に云はく「況んや三惡道無し」文。無三惡と説くと雖も、修羅人天之有り。

四十八願の第一に云はく「設し我仏を得んに、国に地獄・餓鬼・畜生有らば正覺を取らじ」と。

第二の願に云はく「設し我仏を得るも、十方の無量不可思議の諸の三惡道には正覺を取らじ」文。

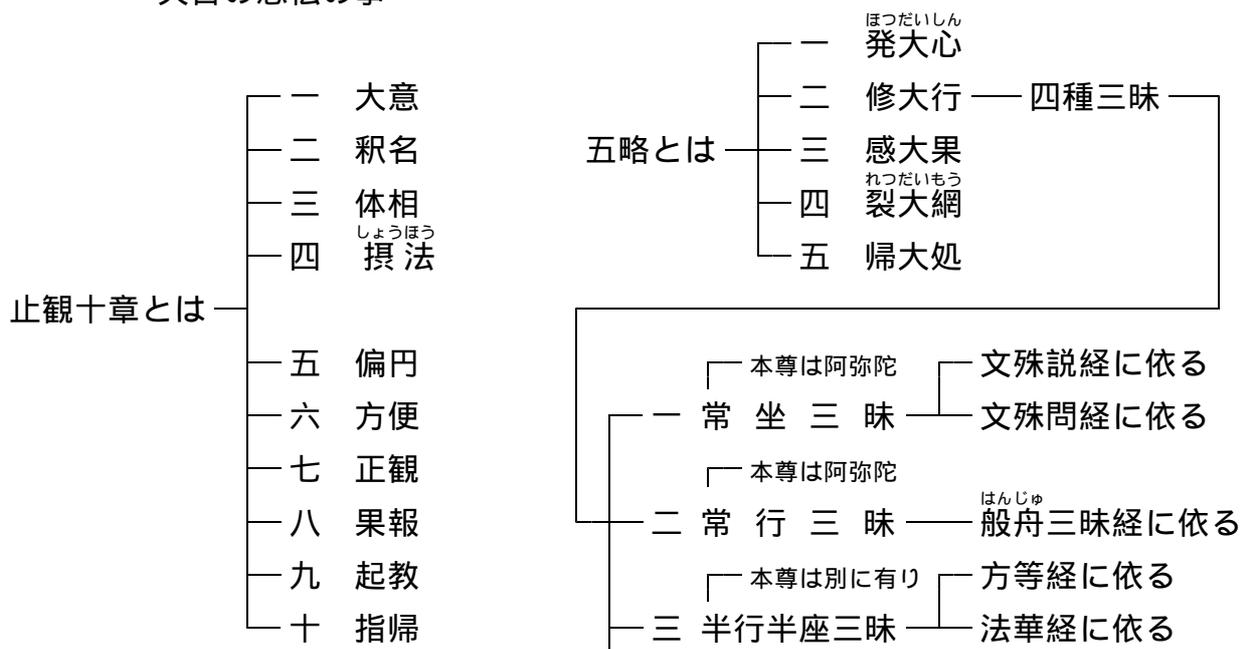
第三十五の願に云はく「設し我仏を得んに、十方の無量不可思議の諸仏の世界に、其れ女人有って我が名号を聞いて歡喜信樂して、菩提心を發こして女身を厭惡せん。壽終の後、復女像と為らば正覺を取らじ」文。

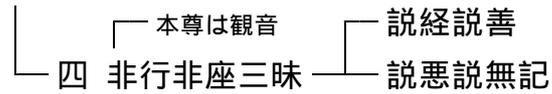
一 黒衣並びに平念珠地獄に墮すべき事

法鼓經に云はく「黒衣の謗法なる必ず地獄に墮す」文。

勢至經に云はく「平形の念珠を以ゆる者は此は是外道の弟子なり、我が弟子に非ず。仏子我が遺弟必ず円形の念珠を用ふべし。次第を超越する者は妄語の罪に因って必ず地獄に墮せん」文。

一 天台の念仏の事





右四種三昧の次いでは先段に之を注せり

止観の七に云はく「若し四種三昧修習の方便は通じて上に説くが如し。唯法華懺のみ別して六時五悔に約して重ねて方便を作す。今五悔に就いて其の位相を明かす」文。

弘決の七に云はく「四種三昧は通じて二十五法を用いて通の方便と為す。若し法華を行ぜんに別して五悔を加へて余行に通ぜず」文。

第七の正修止観とは

止の五に云はく「前の六重は修多羅に依って以て妙解を開き、今は妙解に依って以て正行を立つ」文。

十疑の第四に云はく「釈迦大師一代の説法、処々の聖教に唯衆生心を専らにして、偏に阿弥陀仏を念じて西方の極楽世界に生ぜんことを求めよと勧めたまへり」文。

七疑に云はく「又聞く、西国の伝に云はく、三の菩薩有り。一を無著と名づけ、二を世親と名づけ、三を獅子覺と名づく」文。

八疑に云はく「雜集論に云はく、若し安樂国土に生ぜんと願はゞ即ち往生を得ん等」文。

一 天台御臨終の事

止観の一に云はく「安禪として化し、位五品に居す」文。

弘決の一に云はく「安禪として化し、位五品に居す等とは此臨終の行位を出だすなり。禪定を出でずして端坐して滅を取る。故に安禪而化と云ふ」文。又云はく「法華と觀無量寿の二部の經題を唱へしむ」文。又云はく「香湯を索めて口を漱ぎ竟はって十如・四不生・十法界・四教・三觀・四悉・四諦・十二縁を説くに一々の法門に一切の法を撰す。吾今最後に觀を策まし玄を談ず。最後善寂なり 跏趺して三宝の名を唱へて三昧に入るが如し。即ち其の年十一月二十四日末の時端坐して滅に入りたまふ」文。又云はく「大師生存に常に兜率に生ぜんことを願ふ。臨終に乃ち觀音來迎すと云ふ。当に知るべし、物に軌り機に随ひ縁に順じて化を設く、一准なるべからざることを」文。又云はく「汝善根を種うるに懶くして他の功德を問ふ。盲の乳を問ひ、蹶きたる者の路を訪ふが如し。実を告げて何の益かあらん」文。

選択集の上に云はく「願くは西方の行者各其の意樂に随ひ、或は法華を讀誦して以て往生の業と為し、或は華嚴を讀誦して以て往生の業と為し、或は遮那教主及び諸尊の法等を受持し讀誦して往生の業と為し、或は般若・方等及び涅槃經等を解説し書寫して以て往生の業と為す。是則ち浄土宗觀無量寿經の意なり」文。又云はく「問うて曰く、爾前經の中に何ぞ法華を撰するや。答へて曰く、今言ふ所の撰とは権実偏円等の義を論ずるに非ず。讀誦大乘の言は普く前後の大乘の諸經に通ず」文。

觀無量壽經に云はく「爾の時に王舎大城に一の太子有す、阿闍世と名づく。調達悪友の教に随順して父の王の頻婆沙羅を収執し幽閉して七重の室内に置く」文。

法華經の序品に云はく「韋提希の子阿闍世王若干百千の眷屬と俱なり」文。

慧心の往生要集の上に云はく「夫往生極樂の教行は濁世末代の目足なり。道俗貴賤誰か歸せざらん。但顯密の教法其の文一に非ず。事理の業因其の行惟多し。利智精進の人は未だ難しと為さず。予が如き頑魯の者豈敢へてせんや。是の故に念仏の一門に依って聊か經論の要文を集め、之を披き之を修するに、覺り易く行じ易し」文。

慧心往生要集を破し二十三年已後に一乗要決を作る。一乗要決の上に云はく「諸乗の權實は古来の諍ひなり。俱に經論に抛り互ひに是非を執す。余寛弘丙午の歳、冬十月病中に歎じて曰く、仏法に遇ふと雖も未だ仏意を了せず。若し終に手を空しうせば後悔何ぞ追はん。爰に經論の文義賢哲の章疏、或は人をして尋ねしめ或は自ら思忖す。全く自宗他宗の偏党を捨て、専ら權智実智の深奥を探るに、遂に一乗は眞實の理、五乗は方便の説なることを得るものなり。既に今生の蒙を開く、何ぞ夕死の恨みを遣さん」文。

一 念仏は末代に流布すべき事

双觀經の下に云はく「当來の世に經道滅盡せんに、我慈悲を以て哀愍して、特に此の經を留めて止住すること百歳ならん。其れ衆生有つて斯の經に値ふ者は、意の所願に随つて皆得度すべし」文。

往生禮讚に云はく「万年に三寶滅して此の經住すること百年。爾の時に聞いて一念もせば皆當に往生を得べし」文。

慈恩大師の西方要決に云はく「末法万年に余經悉く滅して弥陀の一教のみ」文。

方便品に云はく「深く虚妄の法に著して堅く受けて捨つべからず。是くの如き人は度し難し」文。

堅慧菩薩の宝性論に云はく「過去謗法の障り不了義に執著す」文。

方便品に云はく「若し余仏に遇はゞ此の法の中に於て便ち決了することを得ん」文。

玄の七に云はく「南岳師の云はく、初依を余仏と名づく。無明未だ破せず、之を名づけて余と為す。能く如来秘密の蔵を知つて深く円理を覺す、之を名づけて仏と為す」文。

涅槃經の疏十一に云はく「人正法を得るが故に聖人と云ふ」文。

像法決疑經に云はく「常施菩薩初成道より乃至涅槃、其の中間に於て如来の一句の法を説くを見ず。然るに諸の衆生は出沒説法度人有りと見る」文。

二十五三昧・二十五有の略頌に曰く「四州四惡趣・六欲並びに梵世・四禪四無色・無想五那含」文。

一 漢土南北の十師天台大師に歸伏する事

國清百録の第四に云はく「千年と五百と實に復今日に在り。南岳の叡聖・天台の明哲、昔は三業住持し、今は二尊紹繼す。豈止甘露を振旦に灑ぐのみならん。亦當に法鼓を

天竺に振ふべし。生知の妙悟、魏・晋より以来典籍風謠實に連類無し」云云。乃至禅衆
一百余僧と共に智者大師を請し奉る天台大師俗姓陳氏、字徳安、諱智顛、潁川の人なり。後即ち南州華容県に遷居す。

一 伝教大師の一期略記に云はく桓武皇帝の御宇延暦廿一年壬午正月十九日伝教大師最澄高尾寺に於て六宗と争ひ責め破り畢んぬ。仍つて勅宣下され帰伏の状を奉りて云はく
「漢明の年に教、震旦に被り、磯島の代に訓本朝に及ぼす。聖徳の皇子は靈山の聖衆にして衡岳の後身なり。経を西隣に請ひ、道を東域に弘む。智者禅師は亦共に靈山に侍し、迹を台岳に降し、同じく法華三昧を悟り、以て諸仏の妙旨を演ぶる者なり。竊かに天台の玄疏を見れば、釈迦一代の教を総括して悉く其の趣を顯はし、処として通ぜざること無し。独り諸宗に逾え殊に一道を示す。其の中の所説甚深の妙理、七箇の大寺六宗の学匠、昔未だ聞かざる所、曾て未だ見ざる所なり。三論・法相の久年の争ひ渙焉として氷のごとく釈け、昭然として既に明らかなり。猶雲霧を披いて三光を見るが猶し。聖徳の弘化してより以降今に二百余年の間、講ずる所の経論其の数惟多し。彼此理を争つて其の疑ひ未だ解けず。而も此の最妙の円宗猶未だ闡揚せず。蓋し以れば、此の間の群生未だ円味に応ぜざるか。伏して惟れば、聖朝久しく如来の付嘱を受け、深く純円の機を結ぶ。一妙の義理始めて乃ち興顯し、六宗の学衆初めて至極を悟る。謂ひつべし、此の界の含靈今よりして後悉く妙円の船に載つて、早く彼岸に済むことを得んと。猶如来の成道四十余年の後、乃ち法華を説いて、悉く三乗の侶をして共に一乗の車に駕せしむるがごとし。善議等慶躍の至りに堪へず。敢へて表を奉つて陳謝以て聞す」云云。

秀句の下に云はく「当に知るべし、已説の四時の経、今説の無量義経、当説の涅槃経は易信易解なることを、随他意の故に。此の法華経は最も為れ難信難解なり、随自意の故に。随自意の説は随他意に勝る。但し無量義を随他意と云ふは未合の一辺を指す。余部の随他意に同じからざるなり」文。

文句の八に云はく「已とは大品以上の漸頓の諸説なり。今とは同一の座席、謂はく無量義経なり。当とは謂はく涅槃なり。大品等の漸頓は皆方便を帯すれば、信を取ること易しと為す。今無量義は一より無量を生ずれども、無量未だ一に還らず、是亦信じ易し。今の法華は法を論ずれば、一切の差別融通して一法に歸す。人を論ずれば則ち師弟の本迹俱に皆久遠なり。二門悉く昔と反すれば、信じ難く解し難し。鋒に当たる難事をば、法華に已に説く。涅槃は後に在れば、則ち信ずべきこと易し。秘要の蔵とは隠して説かざるを秘と為し、一切を総括するを要と為す。真如実相の包蘊せるを蔵と為す。不可分布とは法妙にして信じ難し、深智には授くべし、無智は罪を益す故に、妄りに説くべからざるなり。従昔已来未曾顯説とは、三蔵の中に於ては二乗の作仏を説かず、亦師弟の本迹を明かさず。方等般若には実相の蔵を説くと雖も、亦未だ五乗の作仏を説かず、亦未だ発迹顯本せず。頓漸の諸経は皆未だ融會せず、故に名づけて秘と為す。此の経には具に昔秘する所の法を説く。即ち是秘密蔵を開するに亦即ち是秘密蔵なり。

此くの如きの秘蔵は未だ曾て顕説せず。如来在世猶多怨嫉とは、四十余年には即ち説くことを得ず。今説かんと欲すと雖も、而も五千尋いで即ち座を退く。仏世すら尚爾なり、何に況んや未来をや。理、化し難きに在るなり」と。

楞伽經に云はく「我、得道の夜より涅槃の夜に至るまで一字をも説かず」文。

止観の五に云はく「是の故に二夜一字を説かず」文。又云はく「仏二法に因って此くの如きの説を作したまふ。縁自法と及び本住の法を謂ふ。自法とは彼の如来の得る所、我も亦之を得」文。又云はく「文字を離るゝとは仮名を離るゝなり」文。

法華に云はく「但仮の名字を以て衆生を引導したまふ」文。

玄義の五に云はく「慧能く惑を破し理を顕はす。理は惑を破すこと能はず。理若し惑を破せば一切衆生悉く理性を具す、何が故ぞ破せざる。若し此の慧を得れば則ち能く惑を破す。故に智を用って乗体と為す」文。

弘の五に云はく「何の密語に依って此くの如き説を作したまふ。仏の言はく、二の密語に依る。謂はく自証法及び本住法なり。然るに一代の施化豈権智被物の教無からんや。但此の二に約して未だ曾て説有らず。故に不説と云ふのみ」文。

籤の一に云はく「三に廢迹とは後の如く前の如し。文を引く中、初めに諸仏より下は同を引く。為度より下は正しく廢迹を明かす。廢し已はれば迹無し。故に皆実と云ふ。実は只是本、権は只是迹なり。若し同異を弁ぜば広く第七の卷の如し」文。籤の一に云はく「捨は只是廢なり。故に知んぬ、開と廢とは名異体同なることを」文。

止の六に云はく「和光同塵は結縁の始め、八相成道は以て其の終はりを論ず」文。

弘の六に云はく「和光より下は、身を現ずるを釈するなり。四住の塵に同じ、処々に縁を結び浄土の因を作すを利物の始めと為す。衆生の機熟して八相成道す。身を見て法を聞き終に実益に至る」文。

天照太神の託宣に云はく、「往昔勤修して仏道を成じ、求願円満遍照尊、閻浮に在りては王位を護り、衆生を度せんが為に天照神」と。